



Title	「東」と「西」のはざままで : ポスト社会主義のチェコ共和国に現れた「第3の立場」
Author(s)	坂田, 敦志; Sakata, Atsushi
Citation	境界研究, 12, 33-54
Issue Date	2022-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.12.33
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85034
Type	departmental bulletin paper
File Information	02.pdf, 本文



[論文]

「東」と「西」のはざままで —— ポスト社会主義のチェコ共和国に現れた「第3の立場」 ——

坂田 敦志

はじめに

東欧と西欧、東西2つのヨーロッパの境界領域⁽¹⁾に位置するチェコ共和国(旧チェコスロヴァキア)は冷戦期(1945～1989年)、社会主義体制が敷かれた東側陣営に組み込まれ、資本主義体制を敷く西側陣営に対する東側陣営の最前線としての位置づけを与えられてきた。1989年に社会主義体制が崩壊すると、今度は西欧への回帰を志向する政治勢力が当国の政治・経済体制の「民主化」を主導することとなる⁽²⁾。本稿はさしあたって、2000年代から2010年代にかけての当国の文化的領域において、西欧への回帰という旗印のもと、当国の政治・経済体制の「民主化」を主導してきた政治勢力が東欧とのつながりが疑われる政治勢力とのあいだでどのようなイデオロギー闘争を繰り広げていたのかを、文化人類学的手法を用いて跡づけようとする試みである。以下、本稿が属するポスト社会主義人類学の歩

(1) 東欧と西欧の境界領域は、ドイツでは18世紀の啓蒙主義の時代以降、チェコを含む周辺諸国では19世紀初頭の民族復興期以降、中欧と呼ばれるようになり、己がヨーロッパの中でどのような位置を占めているのかという地政学的位置取りを政治的命題として論じる中欧論を生み出してきた。中欧論の歴史と系譜については、『思想』の特集号(1056号、岩波書店、2012年)のなかで、複数の論者がさまざまな観点から論じている。なお、チェコにおける中欧概念の地詩学的含意については、チェコの文学者クロウトヴォルのエッセイ(ヨゼフ・クロウトヴォル著、石川達夫訳『中欧の詩学』法政大学出版局、2015年)に詳しい。

(2) 社会学者のウィーナーは、1989年以降のチェコ共和国の政治的文脈において、西欧という地政学的領域が、自由市場に関する表象を通じて「回帰すべき理想郷」として追い求められるさまを次のように表現する。「チェコの人びとにとって、自由市場は超越的希望と結びつけられた『神話的形象』となった。この自由市場という名の新たなメシアは、彼らに『聖なる救済』という言葉を想起させた。人びとにとって市場の自由化は、社会主義国家によって粉砕された社会主義期より前の時代の市民性および合理性への回帰をも意味していた」(Elain Weiner, *Market Dreams: Gender, Class, and Capitalism in the Czech Republic* (Michigan: The University of Michigan Press, 2007), p. 62)。さらにウィーナーはこう続ける。「この市民性および合理性への回帰は、それによって彼らが『歴史に帰り』、『ヨーロッパへ帰る』ことができるような時間的・空間的復古を含んでいた。市場化は時間・空間における復古を意味していた」。人びとが自由市場によってもたらされるであろう恩恵を信じて、西欧への回帰というメタナラティヴを支え続けるというウィーナーの見立ては、1989年を機に現れた新たな支配的言説の特徴を的確に捉えている。

みを概観したうえで、(1)本稿がどのような時代区分に基づいて議論を進めるのか、(2)具体的にどのような題材をどのように論じるのか、(3)その試みがポスト社会主義研究においてどのような意義を有しているのかを順に確認していくこととしたい。

1989年に東欧の社会主義体制が次々に崩壊すると、文化人類学ではポスト社会主義人類学という新たな研究分野が誕生し、ポスト社会主義と呼ばれる新たな時間・空間において人びとがいかに生を営んでいるのかという観点から研究が蓄積されてきた⁽³⁾。2000年代に入ると、ポスト社会主義という研究の枠組みに対する批判的見解が内外から寄せられるようになり、最終的には2010年代半ば、ポスト社会主義(社会主義期が重要な参照元とされた時間・空間)からポスト社会主義以後(社会主義期が複数の参照元のうちの1つにすぎなくなった時間・空間)へというパースペクティブが示されるに至る⁽⁴⁾。

社会学者のペヘは、ポスト社会主義という用語を用いてはいないものの、1989年から2010年代半ばに至る四半世紀を、チェコ共和国におけるポスト社会主義に相当する期間とみなしている。

本書が対象としている四半世紀という期間は、偶然に選ばれたものではない。旧体制[社会主義体制]が崩壊して以降の25年間は、共産党支配の時代[社会主義期]をどのように評価するのかという問題が、『衆目を集める』記憶の問題として残っていた。旧体制は全体主義的な体制だったのか。旧体制が成立した経緯とそれが維持されてしまったという事実に関与すべきなのは誰なのか。旧体制に対する抵抗は正当なものだったのか。このような問いが、メディアのコメンテーターや歴史家、文化的制作物の制作者たちの共通の関心事であり続けた⁽⁵⁾。

ペヘの言う「共産党支配の時代[社会主義期]をどのように評価するのか」という問題が、『衆目を集める』問題として残っていた」期間こそ、ポスト社会主義(社会主義期が重要な参照元とされた時間・空間)にほかならない。

本稿はペヘの見解をベースにしつつ、1990年代から2000年代にかけての期間をポスト社会主義、2010年代をポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行期(ポスト社会主義とポスト社会主義以後という2つの基準が競合していた期間)、そして2020年代をポスト社会主義以後とみなしたうえで、2000年代のポスト社会主義の時代および2010年代の

(3) ポスト社会主義人類学の代表的なものとしては、ヴァーデリーによる一連の研究(その成果はヴァーデリーらによって編集された、Michael Burawoy and Katherine Verdery, eds., *Uncertain Transition: Ethnography of Change in the Postsocialist World* (Oxford: Rowman Littlefield Publishers, 1999) に集約されている)や、政治的領域から文化的領域までを幅広く射程に取めたハンフリーの研究(Caroline Humphrey, *Marx Went Away, But Karl Stayed Behind* (Michigan: University of Michigan Press, 1998; idem, *The Unmaking of Soviet Life: Everyday Economies after Socialism* (New York: Cornell University Press, 2002))が挙げられる。

(4) 佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界』風響社、2016年。

(5) Veronika Pehe, *Velvet Retro: Postsocialist Nostalgia and the Politics of Heroism in Czech Popular Culture* (New York: Berghahn Books, 2020), pp. 2–3.

ポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行期を主な検討対象とする。

2010年代をポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行期とみなす時代区分の根拠としては、この期間にANO 2011 (Akce nespokojených občanů (不満のある市民の行動)) やプラハ・ソビエ (Praha sobě (我が事としてのプラハ))、チェコ海賊党(Česká pirátská strana)をはじめとする新興政党が台頭したこと、これらの新興政党の綱領や政治実践において、東欧と西欧、1989年以前(過去)と1989年以降(現在)、社会主義と資本主義といったポスト社会主義に特有の区別が重視されなくなり、代わりにポピュリストとその対抗勢力という構図が前景化している⁽⁶⁾ことの2点が挙げられる。2021年10月の下院選挙において、新興政党間の対立が主な争点となり、共産党や社民党をはじめとする旧左派系政党が議席を完全に失ったことは、2010年代のポスト社会主義からポスト社会主義以後へという移行がこの時点ですでに完了していたということの1つの表れであるように思われる。

本稿は上述の時代区分に基づき、その前半部分(第1節・第2節)では、社会主義期の人びとの何気ない日常を描いた、ある1つの国民的映画の受容局面を検討する。その目的は、2010年代の当国の文化的領域において繰り広げられたイデオロギー闘争のなかに、ポスト社会主義の時間・空間を成立せしめる条件を確認することにある。本稿の後半部分(第3節)では、2004年と2016年に公開された2つのドキュメンタリー映画を取り上げ、ポスト社会主義のイデオロギー闘争の最中に、闘争そのものを批判的に対象化する契機が出現していることを示したうえで、こうした契機が闘争の枠組みを骨抜きにするばかりか、ポスト社会主義の時間・空間を成立せしめる条件を無効にする可能性をも秘めていることを指摘する。

本稿のこうした試みは、ポスト社会主義研究のなかでも、社会主義期をめぐる表象・記憶の問題を扱った菅原およびペへの成果に学ぶところが多い。菅原は2018年に公刊された著書のなかで、社会主義期にユートピア都市建設が試みられたポーランドのクラクフ市のノヴァ・フタ地区をフィールドに、もはやかつてのユートピアへの希求が無効となったように思われるポスト社会主義の文脈において、過去のユートピアを「思い出すこと」が、いかに現在の支配的意味秩序を掘り崩し、新たな希求や価値を創出することにつながっているのかを論じた⁽⁷⁾。ペへは先に挙げた2020年に公刊された著書のなかで、社会主義期に対する回顧的な表象を取り上げ、ポスト社会主義のチェコ共和国において、社会主義期という過去を政治的に拒絶する身振りが、過去に対する風刺と結びついた愛欲的な耽溺(愛着)といかに共存しているのかを巧みに跡づけた⁽⁸⁾。

菅原において、過去(社会主義期)へのノスタルジーがさまざまなアクターによる折衝の

(6) Vlastimil Havlík, “The Economic Crisis in the Shadow of Political Crisis: The Rise of Party Populism in the Czech Republic,” in Hanspeter Kriesi and Takis S. Pappas, eds., *European Populism in the Shadow of the Great Recession*, (Colchester: ECPR Press, 2015), pp. 199–216.

(7) 菅原祥『ユートピアの記憶と今：映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会、2018年。

(8) Pehe, *Velvet Retro*.

過程で齟齬を伴いながら反復されていくことで、現在がいかに創造的に生成されているのかが問われているのだとすると、ペヘにおいては過去(社会主義期)へのノスタルジーが過去の秩序(社会主義体制のもとで形成された価値観の総体)を拒絶し、現在の秩序(資本主義体制のもとで形成された価値観の総体)を享受する身振りのなかでいかに成立しうるのが問われている。

このように、たしかに菅原とペヘのあいだでは、社会主義期という過去に対して回顧的なまなざしを向ける主体が異なっている。菅原において社会主義期に回顧的なまなざしを向けるのは、現在の秩序に居心地の悪さを感じ、過去の秩序を肯定的に振り返る人びとであるのに対して、ペヘにおいて社会主義期に回顧的なまなざしを向けるのは、過去の秩序を政治的に拒絶し、現在の秩序のもとで生を謳歌する人びとである。しかし、菅原とペヘの研究は、ポスト社会主義において、東欧と西欧、過去と現在、社会主義と資本主義という3つの二項対立の複合体が、齟齬や捩じれを孕みつつも反復的に再生産されているさまを浮かび上がらせることを通じて、ポスト社会主義がまさにこの三つ巴の二項対立によって編成された時間・空間であるという事実を等しく指し示す。

菅原とペヘの成果に学びつつ本稿が達成しようと試みるのは、ポスト社会主義を、これら3つの二項対立の複合体を軸に編成された時間・空間とみなしたうえで、(1)ポスト社会主義のイデオロギー闘争が、2010年代のチェコ共和国の文化的領域においていかに繰り広げられているのかを示すこと、(2)上述のイデオロギー闘争の最中に、ポスト社会主義の時間・空間を成立せしめる条件を無効にする可能性を秘めた契機が現れていることを示すこと、以上2点である。

本稿が2つ目の課題を達成できたとき、それはノスタルジー研究、ひいてはポスト社会主義研究において有意義であると言えるであろう。というのも、先行研究ではポスト社会主義を成立せしめる条件の解明に力が割かれてきたのに対し、本稿はこれを無効にする可能性を秘めた契機をあぶり出しを試みるからである。その試みは、ポスト社会主義からポスト社会主義以後へというパラダイム・シフトが、チェコ共和国の文化的領域においていかに生じているのかを解明するための端緒となるはずである。

1. 映画『ペリーシュキ』

1989年以降、とりわけ2000年代から2010年代にかけてのチェコ共和国の文化的領域を論じるにあたって、旧体制(社会主義体制)の残滓とみなされる政治勢力の存在を無視することはできない⁽⁹⁾。旧社会主義諸国のなかで唯一、党名を残したボヘミア・モラヴィア共

(9) 1990年代から2000年代にかけてのチェコの政界における共産党の影響力や党の方向性、支持者の属性などについては、政治学者の坪井の研究(坪井宏平「現代チェコの政党政治におけるボヘミア・モラヴィア共産党」『国際文化研究』15号、2009年、239-251頁)を参照されたい。

産党(Komunistická strana Čech a Moravy)は、2002年の下院選挙において18.5%の得票率を獲得した。以降、2006年の下院選挙では12.8%、2010年の同選挙では11.3%、2013年の同選挙では14.9%、2017年の同選挙では12.5%の得票率を獲得している。しかし、だからといって共産党が今後も下院選挙で安定して15%前後の得票率を維持し続けることができるかと言うと、これはむずかしいと言わざるを得ない。というのも、同党の最大の支持層は65歳以上の高齢の年金受給者であり⁽¹⁰⁾、このまま若者世代の取り込みがうまくいかなければ、支持母体が先細っていくことが予想されるからである⁽¹¹⁾。

先にも確認したように、2010年代のポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行期においては、ANOやプラハ・ソビエ、海賊党といった新興政党が台頭した。さらに、これらの政党の綱領や政治実践では、東欧と西欧、過去と現在、社会主義と資本主義といった二項対立が重視されなくなり、ポピュリストと反ポピュリストといった二項対立が前景化した。しかし、こうした傾向の一方で、2013年に大統領に就任したミロシュ・ゼマン(Miloš Zeman)大統領やANOの党首にして2017年から21年まで当国の首相を務めたアンドレイ・バビシュ(Andrej Babiš)首相を、かつての東側諸国や旧体制(社会主義体制)とのつながりが疑われる政治家として忌避の対象とし続ける人びとが存在し続けていたという事実も見逃せない⁽¹²⁾。

(10) 2017年の下院選挙におけるボヘミア・モラヴィア共産党の最大の支持層を世代・学歴・職業(所得)・居住地の4つの観点から概観してみると、65歳以上の高齢者層(21.5%)、初等教育者(20.5%)、年金受給者(32%)、人口5,000人以上10,000人未満の中都市居住者(14%)となる。Martin Vrba, “Volební preference dle věku, vzdělání, práce, bydliště a pohlaví” [https://a2larm.cz/2017/10/32222/] (2021年7月20日閲覧)。

(11) 注9で挙げた坪井は2009年の時点で、共産党が支持層の属性から政党政治におけるプレゼンスを徐々に失っていく可能性と社民党など他党と連携を図ることで党勢を維持していく可能性という2つの可能性を示していた。2010年代以降の共産党の動向は、まさに坪井によって示された上記2つの可能性を体現するものであり、共産党は他党との連携のなかで党勢の維持を図りつつも、支持層の属性から支持母体を徐々に脆弱化させ、2021年10月の下院選挙で社民党とともに得票率5%を下回り、下院での議席を失った。

(12) ここで次の点を補足しておきたい。それは、2010年代のポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行期において、ゼマン大統領やバビシュ首相をかつての東側諸国や旧体制とのつながりが疑われる人物として忌避していたのが、西欧への回帰を志向し、当国の政治・経済体制の「民主化」を主導・支持してきた人びとに限られていたという点である。ゼマン大統領はときにロシアや中国といったかつての東側諸国とのつながりを強調することで彼らを挑発することがあるものの、バビシュ首相に至っては、東欧と西欧、過去と現在、社会主義と資本主義といった二項対立とは切り離された文脈で政治・経済活動を展開しており、バビシュ首相を旧体制とのつながりが疑われる人物として忌避するのは上述の政治的志向を有する人びとに限定されていた。たとえば、2018年2月の設立以降、反バビシュ首相の旗印のもとに複数回にわたるデモ活動を主導してきた「民主主義のための百万の瞬間(Milion chvilek pro demokracii)」という団体は、バビシュ首相を旧体制とのつながりが疑われる人物として忌避する人びとと、バビシュ首相にポピュリストとしてのラベルを与え、反ポピュリストとして連帯する人びとによって構成されており、この団体に存在する亀裂はポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行の契機となっていたことが予想される。この点の検証については今後の研究課題としたい。

以下、これらの点を踏まえたうえで、社会主義期の人びとの何気ない日常を描いた映画『ペリーシュキ (Pelišky)』⁽¹³⁾ (1999年公開)の受容局面を検討する。はじめに、ノスタルジー映画としての本映画の特徴を確認した後、映画内の1つのシーンをめぐって、動画投稿サイトYouTubeのコメント欄で2017年から1年以上にわたって続いた論争を取り上げ、ポスト社会主義のイデオロギー闘争が2010年代のチェコ共和国の文化的領域においていかに繰り広げられていたのかを見ていくこととした。

1.1 映画『ペリーシュキ』の概要

8千万コルナ、日本円にしておよそ4億円の興行収入を上げた映画『ペリーシュキ』は、ヤン・フジェベイク (Jan Hřebejk) によって撮られた映画であり、ペトル・シャバフ (Petr Šabach) による同名の小説をもとにしている。

「プラハの春」からワルシャワ条約機構軍によるプラハ侵攻までを題材としていながら、本映画には、この政治的文脈を構成するはずの一連のモチーフ、たとえば「改革」をめぐって生じた熾烈な政権内闘争やプラハ侵攻に際して送り込まれてきた戦車や戦闘機、ヴァーツラフ広場における市民と兵士のあいだで繰り広げられた攻防といった要素は一切登場しない。アパートの上下階に住む2家庭のあいだでのイデオロギー闘争を中心に、プラハ郊外の「居心地の良い住処」内での日常が淡々と、そしてコミカルに描かれていく。以下、本映画のシナリオの概要を簡単に確認しておきたい。

アパートの上階に住まうクラウス家の父(以下、クラウス氏)は、「共産党政権はもってあと1年か2年だろう」という台詞が口癖の、痩せ型で気難しい男性であった。これに対して、下階に住まうシェベク家の父(以下、シェベク氏)は軍の要職に就く、小太りでお調子者の男性で、共産党政権に対する信頼は揺るぎない。シェベク家の長男ミハル(主人公)はクラウス家の一人娘インジシュカに思いを寄せているが、インジシュカはアメリカに駐在する外交官の息子エリエンと恋仲である。ミハルもインジシュカもエリエンを通じてアメリカにほのかな憧れを抱いており、互いの両親のあいだで繰り広げられるイデオロギー闘争に辟易している。

やがて、イデオロギーによって隔てられた両家が急速に接近する出来事が起こる。夫クラウス氏を長年にわたり支え、娘インジシュカのよき理解者でもあったクラウス家の母が持病の心臓病で亡くなると、ほどなくしてクラウス氏がシェベク家の母の妹エヴァと再婚

(13) 本映画の原題である Pelišky という用語を日本語に訳すと「居心地の良い住処」となり、家庭(私的領域)を舞台とした映画であることを表す題名となっている。なお、本映画の英語版の題名も“Cozy dens”(居心地の良い住処)となっている。この Pelišky (居心地の良い住処) という用語が、公的領域からの退避場所(シェルター)としての意味を担っていた可能性については、社会主義期における公的領域と私的領域の関係を検討したホリーの議論(Ladislav Holy, *The Little Czech and the Great Czech Nation: National Identity and the Post-communist Social Transformation* (Cambridge University Press, 1996))を参照されたい。

することとなったのである。縁戚関係となった両家はそれまでの禍根を乗り越え、絆を深めていくかに見えたが、1968年8月21日未明のワルシャワ条約機構軍の侵攻を機に永遠の別れへと導かれていく。

1.2 ノスタルジー映画としての『ペリーシュキ』

旧東ドイツでは、1989年以前の社会主義体制を再評価するオスタルギーと呼ばれる政治的・文化的現象がしばしば観察され、それが1つの政治的・文化的潮流を作り出しているという。木戸はそのもっとも典型的な例として、2003年に公開され、600万人を動員した映画『グッバイ、レーニン!』を挙げる⁽¹⁴⁾。社会主義体制の崩壊と東西ドイツの統合という2つのモーメントを経て、急速に「西」化する旧東ドイツ社会の変貌が風刺的に描かれるとき、「過去＝東」は戻りたくても戻れない旧き良き時代としてノスタルジックに立ち現われる。

このように、映画『グッバイ、レーニン!』では、西側世界の制度・文化の大規模な流入に晒された「現在＝西」が風刺の対象とされ、社会主義期が戻りたくても戻れない「過去＝東」として回顧される。これに対して、映画『ペリーシュキ』において風刺の対象とされるのはあくまで「過去＝東」としての社会主義期であって、急速に「西」化する現在は不問に付される。しかし、だからといって、映画『ペリーシュキ』を単に社会主義期を風刺した映画と捉えるのは早計である。

ここで参考にしたいのはペヘの議論⁽¹⁵⁾である。ペヘは映画『ペリーシュキ』の観客たちが映画内のレトロでいかした社会主義的オブジェクトを楽しむと同時に、映画のナラティブを通じて反社会主義的スタンスへと導かれると指摘する⁽¹⁶⁾。ここでは、共産主義者であれ、反共産主義者であれ、映画の登場人物たちは、映画を鑑賞している「われわれ(自己)」が属する現在に侵入してくることはなく、1989年以前の過去に完全に幽閉された「かれら(他者)」として立ち現れ続ける⁽¹⁷⁾。

さらにペヘは、復古的(政治的)ノスタルジーと非復古的(非政治的)ノスタルジーを対抗

(14) 木戸は映画『グッバイ、レーニン!』を機に広がりを見せたオスタルギー現象を、「大がかりな資産および価値の没収であり、一部は自己放棄でもあった『統一』過程を根本的に省察し、民衆レベルの個人史、等身大の経歴にこだわった、しかも皮肉とユーモアを込めた、大文字の歴史教理への対抗戦術と解すべき」と総括している(木戸衛一「ノスタルジーか自己エンパワーメントか：東ドイツにおける『オスタルギー』現象」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院、2006年、239-268頁)。

(15) Veronika Pehe, "An Artificial Unity? Approaches to Post-Socialist Nostalgia," *Tropos* 1, no. 1 (2014), pp. 6-13. なお、ペヘの上記論文は加筆修正が施されたうえで、本稿の「はじめに」で本稿の位置づけを確認するために掲げたペヘの著書の第3章(Pehe, *Velvet Retro*, pp. 64-83)に所収されている。

(16) Pehe, "An Artificial Unity?" pp. 6-13; Fred Davis, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia* (New York: The Free Press, 1979).

(17) Pehe, "An Artificial Unity?" pp. 6-13; Kamil Fila, "Muž na rozcestí," *Respekt* 23, no. 48 (2012), pp. 52-58.

的概念と位置づけるボイムらの分類⁽¹⁸⁾を批判的に継承したうえで、ムードとモードという2つの分類を提起するグランジの試み⁽¹⁹⁾を参考に、ムードとモードが連携し合いながらノスタルジーが形成されていく局面に焦点を合わせる⁽²⁰⁾。

ペヘによると、映画『ペリーシュキ』において、「ポーランド製のグラス」や「東ドイツ製のスプーン」といった個々の社会主義的オブジェクトに対する愛着(ムード)は、「追憶」という形式(モード)を通じて形成される。主人公ミハルによる「幼き日の追憶」という形式(モード)を通じてこそ、社会主義期の記憶を持たない若者世代に対しても、「ポーランド製のグラス」や「東ドイツ製のスプーン」といった社会主義的オブジェクトに対する愛着(ムード)が喚起される⁽²¹⁾。

ペヘのこの議論を踏まえたうえで、改めて映画『ペリーシュキ』を映画『グッバイ、レーニン!』と比較してみると、映画『グッバイ、レーニン!』においては、風刺と回顧という2つの態度が「資本主義：現在＝西」と「社会主義：過去＝東」という2つのカテゴリーに別々に振り分けられるのに対して、映画『ペリーシュキ』においては、「社会主義：過去＝東」という同一のカテゴリーに、風刺と回顧という相反する2つの態度が同時に配分されていると言える。そこでは、「社会主義：過去＝東」が風刺の対象とされると同時に回顧の対象とされる。この点はノスタルジー映画としての映画『ペリーシュキ』の見逃せない特徴である。

2. 終わらぬ闘争

Facebook上に「社会主義の思い出(Vzpomínky na socialismus)」というページがある。ここでは、社会主義期の日常生活の1コマを切り取った写真から当時の電化製品やポスター、子ども用の遊具やキャラクター、在りし日の名優や映像作品などと並んで、映画『ペリーシュキ』内の複数の場面が繰り返し取り上げられ、それぞれのコメント欄において、社会主義期に対する回顧的な語りが異様な盛り上がりを見せている。本ページ全体に対して「いいね」が14万件以上ついており⁽²²⁾、1日数回の更新のたびに「いいね」をはじめとするリアクションがものによっては500件以上寄せられている。

2016年12月以降、現地の政治・文化に関する情報を著者に継続的に提供してくれている男性(1972年生まれ。カレル大学卒業。現在はチェコと日本を行き来しながら、両国の文化・芸術の普及活動に従事)は、「あのページ[「社会主義の思い出」]はとても面白いが、一歩間違えると若者たちを、資本主義よりも社会主義のほうがいいのではないかという誤

(18) Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia* (New York: Basic Books, 2001); Davis, *Yearning for Yesterday*.

(19) Paul Grainge, *Monochrome Memories: Nostalgia and Style in Retro America* (Wastport and London: Prager, 2002).

(20) Pehe, "An Artificial Unity?" pp. 6–13.

(21) Ibid.

(22) 2018年12月9日時点。

った考えに導いてしまう恐れがある」との懸念を示していた。

男性の語りは、1989年に社会主義体制が崩壊してから四半世紀が経過してもなお、旧体制(社会主義体制)が何らかの拍子に蘇ってしまうのではないかという男性の漠然とした不安を反映している。本章では、前章で確認したノスタルジー映画としての映画『ペリーシュキ』の特徴を踏まえつつ、男性が著者に示した、こうした漠然とした不安が人びとのあいだでいかに共有されているのかという観点から、本映画の受容局面で繰り広げられたイデオロギー闘争の検討を進めていくこととしたい。

2.1 「東ドイツ製のスプーン」

「東ドイツ製のスプーン」と題して動画投稿サイト YouTube 上に投稿された、映画『ペリーシュキ』内の一連のシーンは、1968年の夏のとある昼下がりに催された会食の場面を中心に構成されている。会食はシェベク家の母の妹エヴァがクラウス氏の後妻となることを祝うために催され、クラウス家およびシェベク家の面々がクラウス家の居間に一堂に会した。

シェベク氏は卓を囲んだ一同を前に、白いプラスチック製のスプーンを取り出し、それが結婚を前にした2人へのプレゼントであること、そしてそれが「我らが東独の同志」によって生み出された製品であることを得意げに宣言した後、各々の前に用意された淹れ立てのホットコーヒーの中にスプーンを次々に投入していく。しかし、それはあえなくコーヒーの中に溶け出していった。

白くぶよぶよの塊と化した無残な亡骸を前に、一同が顔を見合わせ合う中、クラウス氏が「いったい我らが東の同志はどこで間違いを犯したのだろう」と皮肉交じりに呟くと、シェベク氏の弟ヴァシクもこれに同調する。むきになったシェベク氏が、「お前らは何かというとアメリカだ。そんなにアメリカが偉大なのか。もしここにアメリカ製とソ連製の品があったとしたら、どちらを選ぶんだ？」と食ってかかると、「アメリカ製だ」と即座に呟くクラウス氏にヴァシクも同調し、「俺もアメリカ製だね」とうそぶいてみせた。

この一件ですっかり打ち解けたクラウス氏とヴァシクは、この日の夜には連弾でジャズを奏するまでになった。楽しそうにジャズに興じる2人の神輿に乗り、酔いの回ったシェベク氏もまた、千鳥足でタップダンスをはじめるのであった。ワルシャワ条約機構軍によるプラハ侵攻のニュースがもたらされたのは、それから数時間後のことであった。

「東ドイツ製のスプーン」として動画投稿サイト YouTube 上に投稿された一連のシーンは、両家の和解を象徴する、映画全体の構成上、非常に重要なシーンである。というのも、このシーンで達せられた両家の和解は、この後の展開の重要な布石となるからである。実際、映画はこのシーンを起点に終結部へと一気に進行する。この日の深夜、ワルシャワ条約機構軍のプラハ侵攻の報がラジオを通じて伝えられると、クラウス一家は英国に

亡命、シェバク氏は絶望のあまり、前庭の掘っ立て小屋で首吊り自殺を試みるも衝撃で小屋全体が崩壊し、自殺は未遂に終わる。

このように、「東ドイツ製のスプーン」と題され、映画本体から切り出された一連のシーンは、両家の闘争から和解を経て永遠の離別へと至る映画全体の展開のなかで非常に重要な位置を占めていると言える。

2.2 「東ドイツ製のスプーン」論争

「東ドイツ製のスプーン」と題された動画は、動画投稿サイトYouTube上に、Music, Movie Crips & Funny Videosというチャンネルによって投稿された。本チャンネルによって投稿された動画は、チェコ映画の断片のみならず、世界中のライブ動画を中心とした音楽動画も多数含まれており、そのジャンルもジャズ、ロック、ポップス、クラシックと幅広い。

チャンネル作成者のプロフィールは不明であるが、本チャンネルの「概要」内の国情報に「チェコ」という記載が見られること、動画を分類するカテゴリー名にチェコ語による記載が見られる⁽²³⁾ことなどから、匿名のチェコ語話者が自身の興味関心に従って動画を投稿しているものと考えられる。本動画はチェコ語で「東ドイツ製のスプーン(Lžičky z NDR)」と名づけられ、「チェコ映画のベストシーン(Nejlepší scény z českých filmů a seriálů)」というカテゴリーにおさめられている。投稿時期は2015年、視聴回数は16.1万回となっている⁽²⁴⁾。

なお、本稿を脱稿する直前の2021年7月20日に改めて確認したところ、本動画および本動画の投稿元のチャンネルは2018年1月11日以降のいずれかの時点で削除されてしまったのか、発見することができなかった。文化人類学において検討の対象とされてきた語りが一般的に、エスノグラフィの作者以外にアクセスすることが原理的に不可能であるにもかかわらず、エスノグラフィを支える重要な基体としての役割を果たしてきたのであれば、本稿において、削除された動画のコメント欄に投稿されたコメントを、イデオロギー闘争に潜在する構造を析出するための素材として扱うことに問題はないと判断し⁽²⁵⁾、以下、議論を進めていくこととする。

(23) 音楽動画を集めたカテゴリーには英語で名前が付けられ、映画の関連動画(ほぼチェコ映画)を集めたカテゴリーにはチェコ語で名前が付けられている。このことから、各カテゴリー内の動画が誰を対象に投稿されているかがうかがえる。

(24) 2018年1月11日時点での集計。

(25) 本稿が扱う動画投稿サイトにおけるコメント欄に投稿されたコメントは、エスノグラフィの作者以外のアクセスが原理的に不可能であるという点で、文化人類学における通常の語りと同様の特徴を有しているものの、語り手(コメントの投稿者)の属性や彼らが属している文脈へのアクセスがエスノグラフィの作者にとってさえも原理的に不可能である点で、文化人類学における通常の語りとは一括できない側面も有している。そのような観点から見ると、それはまた、レヴィ＝ストロースが神話論(e.g. クロード・レヴィ＝ストロース『神話論理1：生のもつと火を通したもの』早水洋太郎訳、みすず書房、2006年)において素材とした神話とも比較可能である。レヴィ＝ストロースが神話論において、時代も地域も異なる複数の神話が

動画下部に設けられたコメント欄には、42件のコメントが寄せられている。そのうちリード・コメントは11件であり、その多くが、このエピソードでは「ここが面白い」とか、「この点に気づいた？」といった他愛のないコメントに終始している。評価の件数は各々それなりに集めてはいるものの、返信コメントは数件にとどまっている。ところが、そのなかに1件だけ、24件の返信コメントが付され、炎上とでも言うべき活況を呈するリード・コメントが存在する。返信コメントのどれもが4行(100語)以上の文面であり、なかには1249語に及ぶ長文のコメントも含まれている。

「炎上」を引き起こしたリード・コメントは、ucirakというユーザーによるスロヴァキア語のコメントであった。「物貰いや日雇い労働者が街中に溢れ、国民の8割が借金にまみれている今日の凄惨な状況を見て、私はこう言いたい。いったいどこでEUとUSAの同志は間違いを犯したのだろうか」。このコメントは、「いったい我らが東の同志はどこで間違いを犯したのだろうか」という本エピソード(動画)内のクラウス氏の台詞をもじったものであり、クラウス氏の台詞における「東の同志」という句が「EUとUSAの同志」という句に置き換えられている。

ucirakによるこのリード・コメントに対してIvan Lackoというユーザーが懐疑的な意見を投稿したことをきっかけに、他のユーザー⁽²⁶⁾が次々に参入し、以降、一年以上にわたって論争が繰り広げられていくこととなった⁽²⁷⁾。

以下、論争の概要を示しておく。

リード・コメント(ucirak)：物貰いや日雇い労働者が街中に溢れ、国民の8割が借金にまみれている今日の凄惨な状況を見て、私はこう言いたい。いったいどこでEUとUSAの同志は間違いを犯したのだろうか。

コメント1(Ivan Lacko→ucirak)：あなたの経験は少なくとも私の経験とは違うようです。

コメント2(ucirak→Ivan Lacko)：中央ヨーロッパの一員としての命運を共有しているのであれば、チェコとスロヴァキアの違い⁽²⁸⁾は取るに足らないのでは？

ら人間精神に共通の構造を析出したのと同じように、本稿では、動画投稿サイトのコメント投稿欄における匿名の投稿者たちのやり取りから、そこに潜在する構造を析出することを試みる。神話論における神話も動画投稿サイトにおけるコメント欄に投稿されたコメントも、それぞれがもともと属していた文脈から切り離されたうえで構造を析出するための素材として扱われている点で、共通の特徴を有している。なお、ネットワークコミュニケーションの素材を質的研究としてどのように扱うことができるのかという点については、木村の著作(木村忠正『ハイブリッド・エスノグラフィ：NC研究の質的方法と実践』新曜社、2018年)を参照されたい。

(26) ucirakによるコメント以外のコメントは、チェコ語で書かれている。

(27) 本論争は2018年1月11日の時点で、まだ終結しておらず進行中であった。以下に掲載する論争の概要は2018年1月11日以前のものである。なお、論争の概要の鍵括弧内の用語はすべて著者による補足である。

(28) 先にも確認したように、ucirakによるコメントがスロヴァキア語であるのに対して、他のコメントはチェコ語である。したがって、「われわれが『中央ヨーロッパ』の一員としての命運を共有しているのであれば」

- コメント3 (4ever242→ucirak)：たしかに、われわれは同じ経験をした。それはクソみたいな経験だった。われわれはようやくそこから解放されたんだ。
- コメント4 (ucirak→4ever242)：社会主義期がよかったとは言えないが、少なくとも教育を受けることができたのでは？ いまはチェコスロヴァキアの80%の国民が満足のいく教育を受けられず、その日暮らしを余儀なくされている。現在、われわれは「西洋資本主義の奴隷」だ。
- コメント5 (4ever242→ucirak)：社会主義期、とりわけゴットワルト期の粛清の犠牲者数は膨大だった。
- コメント6 (ucirak→4ever242)：それは数字上のトリックに過ぎない。われわれは現在の大量殺人者アメリカこそ警戒すべきだ。
- コメント7 (krtek→ucirak)：「共産主義の犯罪的哲学」を擁護するなんて恥ずかしい。
- コメント8 (ucirak→krtek)：人びとを搾取するシステムが正当化され、密輸業者と奴隷制度が公的に認められる資本主義社会の欺瞞を見抜けない幼稚さが恥ずかしい。
- コメント9 (4ever242→ucirak)：「貧しい人びと」のために働くより、まずは自分が働いたほうがいいんじゃない？
- コメント10 (ucirak→4ever242)：私は工科大学大学院の出身で、月に3200ユーロの収入がある[決して私怨から社会主義を擁護しているわけではない]。私はあなたのように、資本主義という搾取のシステムを擁護する偽善者ではない。
- コメント11 (4ever242→ucirak)：社会的使命感に駆り立てられているということか。自分がどんな恩恵のもとで暮らしているかをもっと考えたほうがいいんじゃない？
- コメント12 (ucirak→4ever242)：たしかに私には社会的使命感がある。あなたのように、スノップの一員になり下がるわけにはいかない。私は「赤[共産主義者]」であるということに誇りを持っている。
- コメント13 (Weak→ucirak)：私の質問にまったく答えてくれていない...⁽²⁹⁾。
- コメント14 (ucirak→Weak)：すでに答えてるでしょ。
- コメント15 (Weak→ucirak)：たしかに社会主義はヴェネズエラやコロンビアといった発展途上国ではうまくいったけど、先進国ではどうだろう。
- コメント16 (Jesus Christ→全員)：なんて馬鹿な連中だ。どんな時代だってプラスもあればマイナスもある。当時も悪いことがいっぱいあったし、いまだってそうだね。
- コメント17 (Gabriela Novotna→ucirak)：横から失礼します。どうか、その時代[社会主義期]の表面ばかりではなくて、中身もしっかり見てください。メッキは人の目を眩ませるためにあります。個人的には、あの時代がとうの昔に過ぎ去ったことをうれしく思います。また、ドイツ製のスプーンとアメリカ製のマッチのどちらにするのかを自由に選択できるようになったこともまたうれしく思います。わかってもらえるとよいのですが。

という ucirak の断りは、「それはスロヴァキアの話でしょ。チェコは関係ない」という応答を封じ込めるためのレトリック上の戦略であろう。もともとの国力(経済力)の差、基盤とする産業の違い(一般にチェコは工業国、スロヴァキアは農業国とされる)、1993年の連邦解体後の政治・経済政策の違い(チェコがEUから一定程度の距離を持ち続けたのに対して、スロヴァキアはユーロの導入などを通じてEUへの依存を深めていった)などから、1989年以降の両国の社会情勢を同一視することはできないという論調が一般的である。
(29) ucirak が「答えてくれていない」という「私の質問」が何であったのかは不明。削除された可能性もある。

コメント18 (ucirak→Gabrela Novotna)：あなたは現在がどのような詐欺的状况にあるのかを見つめるべきです。資本主義は民主主義の仮面をかぶっていますが、ロシアとの軍事的緊張を高め、人びとから搾取し、メディアを用いて人びとを洗脳します。われわれは病的なシステムのなかで暮らしていますが、えてしてわれわれはそれと向かい合うことを恐れ、近視眼的で盲目的になりがちです。

コメント19 (4ever242→ucirak)：そもそも「貧しい人びと」はインターネットでYouTubeとか、見られないでしょ。あんたのやってることは無意味だね。

コメント20 (pakan357→ucirak)：もし革命がなければ、スマートフォンもなければ、コンピュータもないし、あんたが文句を垂れ流しているYouTubeもなかっただろうね。あんたは自分がどんな恩恵を被っているのかを考えるべきだ。あと、いくつかのフレーズが共産党の党綱領からの引用だね。

コメント21 (lolomgmetobavi→ucirak)：あんたは党のプロパガンダを張り付けまくる共産主義者だ。あんたが自分の周りにシマウマを見ているのか、貧しい人びとを見ているか、そんなことは知ったこっちゃないけど、一番怖い猛獣はあんただよ。

以上、動画「東ドイツ製のスプーン」をめぐって1年以上にわたって繰り返されてきた論争の概要を確認してきた。

その特徴は次の2点に整理できる。(1)論争の構図：論争は主に2つの立場から構成される。一方は、現行の資本主義体制を否定的に捉え、旧体制(社会主義体制)を肯定的に捉える社会主義派、他方は、前者を肯定的に捉え、後者を否定的に捉える資本主義派である。(2)論争の展開：1人の社会主義派(ucirak)のリード・コメントに対して複数の資本主義派が論争を挑み、1人の社会主義派(ucirak)がこれに応戦する。以降、入れ替わり立ち代わり新たなユーザーが論争に参入してくるものの、資本主義派はいつまで経っても1人の社会主義派(ucirak)を論破することができず、結果として1年以上にわたって論争が継続し続けることとなった⁽³⁰⁾。

まず(1)についてであるが、論争が資本主義派と社会主義派の2つの立場から構成されているということは、ほかならぬ本映画の受容局面が上記2つの立場のあいだの論争の場となっていることを示している。このことは、本映画が「社会主義：過去＝東」という1つのカテゴリーに、風刺と回顧という2つの態度が同時に配分されていることによる。「社会主義：過去＝東」が風刺の対象とされると同時に回顧の対象とされることによって、本映画の受容局面に資本主義派と社会主義派が同時に呼び込まれ、結果として両者が闘い合う場が形成されることとなった。

次に(2)についてであるが、論争が終わらないのは、かわるがわる論争に参入してくる資本主義派のユーザーたちが、1人の社会主義派(ucirak)の主張を取るに足らない主張として無視することができないことによる。論争は、映画内のクラウド氏の「社会主義＝東」

(30) 2018年1月11日時点。

に対する風刺的コメントを、「資本主義：現在＝西」に対する風刺的コメントへと反転させた ucirak の「釣り」に資本主義派が引っかかったことに端を発する。以降、複数の資本主義派が ucirak を論破しようと試み続けることによって、論争の終わりが先送りにされ続けることとなる。仮に、本論争が1人の社会主義派と1人の資本主義派のあいだの対一の論争なのであれば、論争の長期化は彼らの個人的な気質に帰すこともできるであろう。しかし、1年以上にわたって複数のユーザーが入れ替わり立ち替わり論争に参加し続けているということになると、これはもはや社会的な現象とみなさざるを得ない。

「社会主義＝東」を嘲る映画内の台詞を「資本主義：現在＝西」を嘲るコメントへと反転させた1人の社会主義派の機知は、ポスト社会主義の言論空間において、ほかならぬ社会主義派の主張が、条件さえ整えば正しい言明として流通しかねないという資本主義派の恐怖を明るみに出す。かつての党の公式見解をただひたすら反復しているだけに見えるその主張は、社会主義体制の崩壊から四半世紀を経てもなお、人びとの関心を喚起し続けている。

3. ポスト社会主義に現れた「第3の立場」

以上、2010年代のチェコ共和国の文化的領域においてイデオロギー闘争がいかに繰り広げられていたのかを、映画『ペリーシュキ』の受容局面のなかに明らかにしてきた。1989年以降、西欧への回帰という旗印のもと、当国の政治・経済の「民主化」を主導してきた政治勢力を「西」派（資本主義派）、東欧とのつながりが疑われる古い勢力を「東」派（社会主義派）と呼ぶとすると、「東」派は1つの政治的イデオロギーのもとに統合され得る一塊の政治勢力というよりも、「西」派によって産出され続ける想像上の形象とみなすほうが適当であろう。

映画『ペリーシュキ』の受容局面に生じた論争は、「東」派に対する「西」派の潜在的な恐怖を浮かび上がらせた。しかし、ポスト社会主義は「西」派と「東」派が闘ぎ合う時間・空間であるばかりではない。それは同時に、2つの立場のどちらにも回収されない「第3の立場」とでも呼ぶべき立場を生み出した。本章では、1人のドキュメンタリー作家によって制作された2つの映像作品に「第3の立場」が現れていることを確認したうえで、この立場がポスト社会主義のイデオロギー闘争においてどのような働きを示しているのかを、複数の事例のなかに明らかにしていくこととしたい。

3.1 映画『チェコの夢』・『クルテックと老子』

社会学者のウィーナーは、ポスト社会主義の女性工場労働者の語りを分析した著書の序章で1つのドキュメンタリー映画を紹介する⁽³¹⁾。『チェコの夢(Český sen)』と題されたこの映像作品は、当時、FAMU（プラハ芸術アカデミー映像学部）の学生であったフィリップ・

(31) Weiner, *Market Dreams*, p. 1.

レムンダ(Filip Remunda)とヴィート・クルサーク(Vít Klusák)の卒業制作として制作され、2004年に公開された。

映画『チェコの夢』では、巨大なショッピングセンターがプラハ郊外に開店するというデマに翻弄される人びとの様子が風刺的に描かれている。ウィーナーはその様子を、「西＝自由市場」化を基調とする1989年以降の当国の新たな潮流を表象したものとして提示する。ショッピングセンターは1989年を機に大量に流入してきた西側資本の象徴であり、これに殺到する人びとの姿が「西＝自由市場」化の未来を信じて疑わない人びとの思想的状況を表しているというのである⁽³²⁾。

しかし、ウィーナーの分析からは、レムンダとクルサークがどのような立場から本映画を制作したのかという視点が抜け落ちている。作品の企画からシナリオ、映像に至るまで、そこにおいて変わらずに強調されているのは、ショッピングセンターに押し寄せる人びとと制作者とのあいだの距離である。

人びとはショッピングセンターの開店を報せるチラシに狂喜乱舞し、開店までの日数を指折り数え、いよいよ開店当日になると、家族を伴って自宅から数キロの道のりを自前のショッピングカートを押して現地に向かうも、それがショッピングセンターを模した巨大な張り子であることに気づいた途端、レムンダとクルサークが扮する2人のオーナーに襲い掛かる。

ウィーナーが指摘するように、ショッピングセンターに押し寄せる人びとの姿が「西＝自由市場」化の未来を信じて疑わない人びとの思想的状況を表象しているのだとすると、人びとに袋叩きにされるレムンダとクルサークは、単に過熱する消費主義を風刺するばかりではなく、「西＝自由市場」化の潮流をも風刺していると考えられる。

レムンダとクルサークのこうした立場を、本章の導入部で確認したイデオロギー闘争の構図のなかに位置づけようとするならば、それは「東」派、すなわち現行の資本主義体制を否定的に捉え、旧体制(社会主義体制)を肯定的に評価する立場とみなせそうである。ところが、2016年に公開されたレムンダ制作のドキュメンタリー映画『クルテックと老子(Krtek a Lao-C')』を観ると、事はそれほど単純ではないということがわかってくる。

映画『クルテックと老子』の冒頭、カメラがプラハ市街地の遠景から、街頭に整然と吊るされた中国国旗とチェコ国旗へと切り替わるなか、カメラの手前にかざされたスマートフォンの中では、中国の国営放送で放映されたゼマン大統領のインタビューが流されている。そこでは、クルテック(モグラのキャラクター)⁽³³⁾のぬいぐるみを手にしたゼマン大

(32) Ibid., pp. 3-5.

(33) 1957年にテレビ放映が開始されたチェコのアニメーションの題名であり、モグラを模した主人公の名前でもある。1回目の放映のみ台詞が吹き込まれており、クルテック(モグラ)が1着のズボンを製作する工程を描きながら分業の大切さを説く。本アニメーションは中国においても放映され、人気を博している。クルテックが両国の親善大使の役割を務めることができたのは、こうした背景による。

統領のたどたどしい英語での受け答えが、中国人女性インタビュアーのこなれた英語と対比される。続いて、習近平国家主席の訪チェコに合わせ、チェコ全土から沿道に集結してきた中国人たちの浮世離れした立ち振る舞いが、習主席の被り物⁽³⁴⁾やウイグルの旗を伴い、プラハ城前の広場に雪崩れ込むチェコ人たちの警戒感と対比され、さらには北京で開催されたシンポジウムにおける共産党書記長ヴォイチェフ・フィリップ(Vojtěch Filip)の型通りで冗長な演説が、中国人女性給仕の能面のような表情と対比される。どのカット、どのイメージにおいても強調されているのは、居心地の悪さ、噛み合わせの悪さ、ちぐはぐさである。

このように、映画『クルテックと老子』においては、親ロシア・親中国政策を無批判に推進し続ける政治家としてゼマン大統領が風刺され、中国国旗をめぐるひと悶着やチベット人女性活動家の独白など、複数のシーンを通じて、中国政府による露骨で見え透いたイデオロギー的演出と、これに気づかぬふりをし続けるチェコ側の政治的怠慢と脇の甘さとが対比的手法を用いて強調され続ける。

レムンダはクルサークとともに、2004年に公開された映画『チェコの夢』において、当時の過熱する消費主義を風刺すると同時に、その背後の「西＝自由市場」化の潮流をも風刺した。ところが、それからおよそ10年の時を経て公開された映画『クルテックと老子』においてレムンダは、ロシアや中国といったかつての東側諸国とのつながりが疑われる政治家としてゼマン大統領を風刺する。

このことは、映画『チェコの夢』から映画『クルテックと老子』に至るおよそ10年のあいだに、レムンダが「東」派から「西」派へと転向した可能性を示唆しているようにも見える。しかし、映画『チェコの夢』の導入部分から明らかとなるのは、レムンダが同映画の制作時点ですでに「西」派でも「東」派でもない立場、すなわち「第3の立場」を確保していたということである。

映画『チェコの夢』の導入部では、黒一色のモノクロ画面に1972年というテロップが白抜きで示され、スーパーマーケットの外側にできた長蛇の列が映し出されたあと、今度は1989年というテロップが同様の手法で示され、ヴァーツラフ広場のデモ隊に襲い掛かる機動隊の映像がこれに続く。さらに、2002年というテロップが示されたのち、デモ隊に襲い掛かる機動隊の映像に、新たに開店するショッピングセンターに殺到する人びとの映像が重ね合わされる。

そこでは、これら3つのシーン、すなわちスーパーマーケットの外側にできた長蛇の列、デモ隊に襲い掛かる機動隊、そして新たに開店するショッピングセンターに殺到する人び

(34) 習主席の巨大な被り物をかぶっているのは、ミラン・オパフスキー (Milan Opavský) という民間の政治活動家である。レムンダによる路上インタビューのなかでオパフスキーは、少数民族の抑圧や人権侵害を隠そうともしない中国政府との協調融和路線を推進するゼマン大統領に対する抗議の意図を語る。

との対称性が強調される。もちろん、これら3つのシーンはそれぞれ社会主義期、「ピロード革命」、ポスト社会主義期という3つのフェーズを象徴するものとして示されている。このように、映画『チェコの夢』の導入部に配された一連のシーンには、1989年を基点に分かたれる2つの領域、2つの時代、2つのイデオロギーを対称的にまなざす制作者の視点が刻印されている。

この点について示唆的であるのは、雑誌『フィルム・インターナショナル』のインタビュー記事におけるレムンダの次の発言である。

インタビュアー：あなたの作品[映画『チェコの夢』]がこれらの伝統[ユーモアを抵抗の一形態として活用するという伝統]のうえに成り立っているユニークな点の1つは、新しい形式の権力を取り上げていることです。

レムンダ：チェコ共和国の環境は、先進的な西側諸国よりもこのような考え方に会うのに適しているかもしれません。なぜなら、チェコ共和国はまだ新しい国であり、ドイツ人やロシア人、そして現在ではビッグ・マネーといった、さまざまな植民者に対して、ユーモアに基づいた抵抗を行う伝統があるからです。(……)この映画は、チェコ・テレビ、FAMU（プラハ芸術アカデミー映像学部）、文化省が運営するチェコ映画支援基金の支援を受けました。つまり、国家がこのような非常に物議を醸すプロジェクトを支援したわけです。同時に、かつて共産主義者のもとで国家のために働いていた人びとが、現在では資本主義体制のために働いています。[この新しい体制に]どのように参加するのかは、私たちひとりひとりが決断しなければなりません。ソヴィエト時代[社会主義期]の抗議活動では、[本映画の共同制作者である]クルサークの母親はクルサークが生まれた直後に警察に逮捕されました。警察に協力して家に帰り、赤ん坊の面倒を見られるようにするか、さもなければ何か月も監禁されるかを決めなければならなかったのです。彼女は「いいえ」と答え、刑務所に入れられました。しかし、今日、私たちは同じような選択をできるのでしょうか？⁽³⁵⁾

レムンダの言う「ドイツ人」がナチス・ドイツを、「ロシア人」がソヴィエト連邦を、そして「ビッグ・マネー」が巨大資本によって世界を制する西側諸国を表しているのだとすると、レムンダはナチス・ドイツ、ソヴィエト連邦、そして西側諸国を等しく「植民者」とみなしており、映画『チェコの夢』において、映像上のさまざまなトリックを用いることによって、これらの「植民者」に対する抵抗を示していると言えるだろう。

本インタビューのなかでレムンダが、「かつて共産主義者のもとで国家のために働いていた人びとが、現在では資本主義体制のために働いて」と指摘するとき、そして「[この新しい体制に]どのように参加するのかは、私たちひとりひとりが決断しなければならぬ」と主張するとき、これらの指摘や主張には、過去の社会主義体制と現在の資本主義

(35) Roderick Coover, "Czech Dream in a Capitalist Republic: An Interview with Czech Film-maker Filip Remunda," *Film International* 3, no. 3 (Esnkede: Sweden, 2007), pp. 63–68.

体制を等しく俯瞰し、批判的に対象化する視点を見出すことができる。

このように、雑誌『フィルム・インターナショナル』に掲載されたレムンダのインタビュー記事は、映画『チェコの夢』の導入部分に配された一連のシーンがまさにこの視点、すなわち過去の社会主義体制と現在の資本主義体制のどちらか一方に与することも、どちらか一方を断罪することもなく、両者を等しく俯瞰し、批判的に対象化する視点によって構成されているということを示している。

3.2 「第3の立場」の働き

かつてユルチャクが後期ソヴィエトの人びとの秩序に対する態度に見出したアイロニー⁽³⁶⁾を、大杉は秩序への没入と秩序の対象化が同時に達成された態度として定式化している⁽³⁷⁾。この構図に依拠すると、ユルチャクが自らのアイロニー概念を導入する際に対抗概念として示したスローターダイクのシニシズム⁽³⁸⁾は、秩序の対象化が極まった態度と表現することができるだろう。

前節でフィルプ・レムンダの2つの映像作品から析出した「第3の立場」は、ユルチャクのアイロニーよりもスローターダイクのシニシズムに近い。この立場は1989年以降に成立した新たな秩序と1989年以前の古い秩序の双方を批判的に対象化することで、新旧2つの秩序に対して等しくシニカルな態度をとる立場と言える。本節で検討したいのは、新旧2つの秩序に対して等しくシニカルな態度をとる「第3の立場」が、それ自体としてどのようなイデオロギー的主張を有しているのか、そしてそれがポスト社会主義のイデオロギー闘争においてどのような働きを示しているのかという点である。

著者に映画『ペリーシュキ』をはじめと勧めてくれたのは、アパートの同居人のチェコ男性であった。2010年の夏、カレル大学の学生寮を1年ほどで退室した著者は、「ヨーロッパ通り」沿いのパネラーク(社会主義期に建てられた団地)の10階の部屋で1年間ほど彼と暮らしていた。

2010年当時、20代後半であった同居人は、温泉保養地として有名なカルロヴィ・ヴァリ⁽³⁹⁾の出身で、チェコ工科大学を卒業後、チェコ航空に入社し、整備部門のマネージャー

(36) Alexei Yurchak, *Everything Was Forever, Until It Was No More: The Last Soviet Generation* (Princeton: Princeton University Press, 2005). 本著作の邦訳版は、アレクセイ・ユルチャク著、半谷史郎訳『最後のソ連世代：プレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017年。

(37) 大杉高司「〈アイロニー〉の翻訳：ポスト・ユートピアが人類学に教えること」『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、2008年、309-340頁。

(38) ベーター・スローターダイク著、高田瑞樹訳『シニカル理性批判』ミネルヴァ書房、1996年。

(39) 首都ブラハの西北、ドイツとの国境付近に位置するカルロヴィ・ヴァリ(ドイツ語：Karlsbad、チェコ語：Karovy Vary)は温泉保養地として、さらには政治的に重要な国際会議の開催地として、その時々の為政者たちが頻りに訪れる街であり、その痕跡が街の至る所に残されている(とりわけドイツおよびロシアによる「占領」の歴史が色濃く残されている)。国際映画祭の開催地として有名となった現在においても、当地の不

職として働いていた。彼の父親は水道関係の公社を勤め上げ、母親は小学校でチェコ語の教師をしていた。父親は話題が1989年の体制転換に及ぶと、『『私有化』⁽⁴⁰⁾以降、国外の企業が流入してきたことで、国益が大きく損なわれた」とぼやいていた。父親のこうしたスタンスが影響したのか、同居人は同世代のいわゆる高学歴エリートとしては「社会主義：過去＝東」に対して少し変わった意見を持っており⁽⁴¹⁾、いつもこちらの意図を見透かしたように、「資本主義も社会主義もたいして変わらないよ」と笑っていた。

同居人のこの何気ない発言、すなわち「資本主義も社会主義もたいして変わらない」という発言こそ、「第3の立場」のイデオロギー的な立ち位置を端的に表明したものと言えるだろう。現行の資本主義体制を前向きに享受するわけでもなければ、旧体制(社会主義体制)に想いを馳せるわけでも、その復古を願うわけでもない。そうかといって、千年期資本主義やネオリベラリズムといった他のイデオロギーを積極的に標榜するわけでもない。イデオロギー的穴とでも言うべき立場であるが、もしこの立場が何らかの明示的な言明を有しているのだとすると、それは「資本主義も社会主義もたいして変わらない」ということになるだろう。それでは、この「第3の立場」はポスト社会主義のイデオロギー闘争において、どのような働きを示しているのだろうか。

ここで、第2章で検討した「東ドイツ製のスプーン」論争の16番目のコメントをご覧ください。Jesus Christというユーザーが、「なんて馬鹿な連中だ。どんな時代だって、プラスもあればマイナスもある。当時も悪いことがいっぱいあったし、いまだってそうだ」というコメントを投稿している。

着目したいのは、Jesus Christが社会主義派として孤軍奮闘する ucirak のみならず、ucirak を黙らせようと入れ代わり立ち代わり論争に参入してくる資本主義派をも含めた全ユーザーを一括して揶揄しているという点である。「馬鹿な連中」という言葉は、ucirak のみならず、論争の参加者全体に向けられている。社会主義期であろうが、1989年以降であろうが、

動産がロシア・マフィアによって牛耳られているという噂(カルロヴィ・ヴァリ郊外にロシア・マフィアによって建設された街があるという噂も耳にした)や、ロシアの政治家たちが資産運用の一環として当地の不動産を買い占めているという噂もある。実際、カルロヴィ・ヴァリの市街地を歩くと、キリル文字で「空き家」などと書かれた住宅を多数目にする。これらの噂は、この地が東方勢力の西端(最前線)であるという地政学的想像力を喚起する。いずれにしても、この街はチェコ国内の他のどの街よりも、為政者の変転の影響を受け続けてきた街であると言える。なお、同居人の実家は、カルロヴィ・ヴァリの市街地からバスで10分ほどのパネラーク街にある。

(40) 1989年の社会主義政権の崩壊に伴う体制転換は、話者のスタンスや文脈によって、「私有化(privatizace)」と呼ばれることがある。

(41) 2017年の下院選挙における大卒者の支持政党としては、日系のトミオ・オカムラ(Tomio Okamura)が党首を務める極右政党「自由と直接民主主義」(SPD: Svoboda a přímá demokracie)や緑の党などが挙げられ、左派系の政党に対する支持は低調である。なお、大学生の支持政党としては、ANOが26.5%、海賊党が14%、SPDが13.5%となっている(Vrba, “Volební preference”)

「どんな時代だって」、その恩恵に預かれない人間がいるのは当たり前のことであり、このことをどちらか一方の時代のみには押しつけるのはバカバカしいという論法である。

Jesus Christは論争上で相対する2つの立場の双方を揶揄することで、論争が依拠する前提そのものを明るみに出す。資本主義派と社会主義派は、どちらの時代を支持するのかという点で立場を違えるものの、任意の社会状況を特定のカテゴリーに紐づけて捉える点でそのスタンスを同じくする。資本主義派にしても社会主義派にしても、人びとの貧困や教育環境といった社会状況を、「資本主義：現在＝西」、「社会主義：過去＝東」のどちらか一方のカテゴリーと関連づけて論じる点で変わりはない。Jesus Christは論争において相対する2つの立場が暗黙裡に依拠するこのスタンスに異議を唱えることによって、論争の前提そのものを明るみに出す⁽⁴²⁾。

新旧2つの秩序に対して等しくシニカルな態度をとる「第3の立場」は、まさにその態度

(42) 他のコメント投稿者、たとえば4ever242やGabriela Novotnaなどが自分の体験として社会主義を語っているように見えるのに対して、Jesus Christのコメントにはそのような体験色が希薄である。先に挙げた同居人(1983年生まれ)の発言にもそうした体験色が希薄であることから、そこに世代間のギャップを指摘することもできるかもしれない。著者の肌感覚としては、1975年生まれ(2022年現在で47歳)、すなわち1989年の「革命」を迎えたタイミングが思春期のあとであったか前であったかが1つの境界になっているように思われる。たとえば、同じ「西」派に分類される人びとであっても、「マサリクのチェコスロヴァキア」(第一共和国)への想いをことあるごとに語り、1989年以降の「民主化」の主導者ヴァーツラフ・ハヴェル(Václav Havel)元大統領への敬愛の念を常日頃より口にする40代半ば以上の人びとは対照的に、著者の前で立って「西」派としての矜持を示す若者は少なかった。このほかにも世代間のギャップを示唆するエピソードは少なくない。反パピシュ首相の運動を率先する団体「民主主義のための百万の瞬間」の中心メンバーは、カレル大学哲学部出身の若者たちであったが、「社会主義の思い出」というFacebook上のページに対する懸念を著者に示した男性(1972年生まれ)をはじめ、旧世代(1975年以前の生まれ)の人びとは彼ら新世代(1975年以降の生まれ)の活動をサポートするスタンスを示しつつも、彼らに対する微妙な距離感を示すことも少なくなかった。たとえば、「民主主義のための百万の瞬間」の旗揚げ者ミクラージュ・ミナージュ(Mikuláš Minář)が新党を立ち上げ、政界に進出しようと、ネット上で賛同の署名を募った際、上述の男性(1972年生まれ)は署名が思うように集まっていないことを嘆きつつも、男性自身も署名をしていないようであった。その後、著者が男性に会うたびに署名をしたかどうかを尋ねてくることを疎ましく思ったのか、期限ぎりぎりに署名したことを少し気恥ずかしそうに告白してくれた。2019年6月と11月の反首相デモには、それぞれ25万人以上の人びとを動員したにもかかわらず、結局、署名数は新党の立ち上げに必要な5万人に届かず、新党の立ち上げは棚上げとなった。1975年生まれを境にした亀裂は、「社会主義：東＝過去」と「資本主義：西＝現在」という三つ巴の二項対立のなかで生きている人びとと、そうした二項対立が無効になりつつある時間・空間に生きる人びととのあいだの亀裂であることが予想され、ポスト社会主義からポスト社会主義以後へというパラダイム・シフトの1つの要因となっている可能性がある。Jesus Christや同居人(1983年生まれ)の言動に本稿が見出した「第3の立場」にしても、彼らが1975年以降生まれの新世代であることが推測されることから、「第3の立場」を新世代に特有の現象とみなせるかもしれない。しかし、フィリップ・レムンダが1973年生まれであるという事実を考慮に入れると、本稿のなかでこの論点を論証することはむずかしいと判断せざるを得なかった。いずれにしても、世代論は当国の2010年代に生じたパラダイム・シフトを解明する重要な論点であることはまちがいない、この点の解明は今後の研究課題とした。

を通じてポスト社会主義のイデオロギー闘争の外部に逃れ出て、闘争が依拠する暗黙の前提を明るみに出す。そこにおいてその都度、喚起されているのは、闘争の前提がそれによって形成される、東欧と西欧、過去と現在、社会主義と資本主義という三つ巴の二項対立の無根拠性であり、その恣意性である。ポスト社会主義がこの三つ巴の二項対立によって編成された時間・空間なのだとする、「第3の立場」は新旧2つの秩序に対するシニカルな態度を通じて、ポスト社会主義を成立せしめる条件を無効にする可能性を秘めた契機であると言えるだろう。

おわりに

2018年10月、「チェコ自由戦士同盟(Český svaz bojovníků za svobodu) (以下、ČSBS)」が、共産党員ズデニェク・オンドラーチェク(Zdeněk Ondráček)に記念メダルを授与したことが新聞紙面⁽⁴³⁾を賑わせた。ČSBSは第二次世界大戦時の抗ナチス組織「チェコ反ファシズム自由同盟(Český svaz protifasistických svobodu)」の後継組織である。ČSBSの現会長ヤロスラフ・ヴォディチカ(Jaroslav Vodicka)が共産党員であることを考慮すると、共産党員オンドラーチェクへのメダル授与はそれほど不思議なことではない。

しかし、事はこれだけで終わらなかった。オンドラーチェクへのメダル授与を受けて、プラハ14区長ラデク・ヴォンドラ(Radek Vondra)とピルゼン市長ヨゼフ・ベルナルド(Josef Bernard)が以前、ČSBSから授与されていたメダルの返還を申し出たのである。返還の背景として各種報道⁽⁴⁴⁾では、オンドラーチェクの父が旧体制下で「粛清」に関与した政治家であったこと、オンドラーチェク自身が「革命」のデモ隊に警棒を振り下ろした警官であったこと、そしてゼマン大統領に対する批判的な言論を封じ込めることを目的とした「大統領侮辱罪(čin veřejného hanobení prezidenta republiky)」を国会に提出した張本人であったことなどが取り沙汰された。

さらに、この事件と前後して、プラハ市長ズデニェク・フジブ(Zdeněk Hřib)が、ČSBSのプラハ市庁舎での集会申請を許可しなかったことが報道された⁽⁴⁵⁾。海賊党の党員であるフジブは、この件に関して次のようなコメントを公表した。「1989年にデモ隊に警棒を振

(43) たとえば、“Svaz bojovníků za svobodu ocenil komunistu Ondráčka pamětní medailí,” *iDNES.CZ.*, Oct. 20, 2018 [https://www.idnes.cz/zpravy/domaci/zdenek-ondracek-pametni-medaille-oceneni-za-svobodu-cesky-svaz-bojovniku-za-svobodu.A181020_114356_domaci_dh](2021年7月20日閲覧)や、“Svaz bojovníků za svobodu ocenil poslance Ondráčka, který rozháněl demonstrace v roce 1989,” *ČT24*, Oct. 18, 2020 [<https://ct24.ceskatelevize.cz/domaci/2628653-svaz-bojovniku-za-svobodu-ocenil-poslance-ondracka-ktery-rozhanel-demonstrace-v-roce>](2021年7月20日閲覧)など。

(44) *Ibid.*

(45) “Hřib odmítl půjčit svazu bojovníků za svobodu sál kvůli ocenění Ondráčka. Spolek už rozeslal pozvánky,” *iROZHLAS*, Feb. 15, 2019 [https://www.irozhlas.cz/zpravy-domov/zdenek-hrib-praha-vodicka-cesky-svaz-bojovniku-za-svobodu_1902151815_jgr](2021年7月20日閲覧)。

り下ろした人間にメダルを送るような団体が私の後援を頼むなどもってのほかである」⁽⁴⁶⁾。

この出来事は、2010年代の後半に至っても依然として旧体制とのつながりをめぐる論点が「衆目を集める」問題であり続けていたということ、すなわち2010年代を通じてポスト社会主義(社会主義期が重要な参照元とされた時間・空間)の論理が残存し続けていたことを示している。しかし、2010年代は同時に、ポスト社会主義以後(社会主義期が数ある参照元の1つにすぎなくなった時間・空間)の論理が前景化した時代でもあった。本稿は、ポスト社会主義のイデオロギー闘争の最中に、新旧2つの秩序に対して等しくシニカルな態度をとる「第3の立場」が現れていることを指摘することで、ポスト社会主義からポスト社会主義以後への移行の契機を示してきた。

2016年、ポスト社会主義人類学においてポスト社会主義からポスト社会主義以後へというパラダイム・シフトが提示されたということは、「はじめに」で確認したとおりである。本稿がポスト社会主義人類学、ひいてはポスト社会主義研究において何らかの意義を有しているのだとすると、それはポスト社会主義からポスト社会主義以後へというパラダイム・シフトが、チェコ共和国の政治・文化的領域においていかに生じているのかを解明するための端緒を示すことができたという点にあると言えるだろう。

(46) Ibid.